

# 知恩寺土佐家墓所(一)

松尾 芳樹

寺田貞次の『京都名家墳墓録』(大正11年/京都文華堂。復刻版:昭和51年/村田書店)には、土佐家の絵師11人(光則・光起・光成・光祐・光淳・光時・光禄・光文・光貞・光孚・光清)の墓が収録されている。全て京都市左京区にある浄土宗の寺院知恩寺にあるとされる。通称百万遍の名で知られるこの寺に土佐家が墓所を定めた理由は定かではない。

明治期の京都の墓碑の記録としては、他に西村兼文の「京都府下畫家墳墓記」(『日本絵画論大系Ⅳ』所収)があるが、これと比べると、土佐光元と土佐光芳のものが見えない。光元については土佐家に遺る明治期の書付(「土佐光信伝」<「近世土佐派記録(一)」(『京都市立芸術大学芸術資料館年報第3号』1993)>)に、墓地不詳とし、土佐光則が初めて知恩寺に埋葬されたとしているところから、西村の誤としてよいだろう。また光芳については、現在も墓があるのだから寺田の見落としと考えられる。光芳の伝記があまり知られていなかったため、落飾後の法号である常覚という碑銘が理解されなかったという理由が考えられる。先の土佐家の書付にもあり、この墓域にある墓で最も古いのは土佐光吉の子とも弟子ともいわれる光則のものである。彼が土佐光起を連れて堺から京都に戻ってきたのは寛永11年(1634)頃というが、土佐家再興に尽力してまもなく没しており、墓には寛永15年正月16日の年紀を刻む。

光則の子である光起の墓はその子光成とともに夫婦合葬墓として建立されている。光成の妻の没年からみて、碑の建立は享保16年(1731)を遡ることではない。光成の子である光祐は、この墓の建立以前である宝永7年(1710)に36歳で亡くなっているから、その建立を行ったのは光成の孫にあたる光芳ということになる。この墓に隣接する五輪塔は土佐家先祖供養塔であり、光祐が宝永7年4月8日、即ち亡くなる3カ月前に建立したものである。この地を土佐家代々の墓所とする認識はこの光祐の時代に確認されたといってよいだろう。この二つの碑の北隣には天保14年(1843)に没した土佐光文妻の墓があり、三基が切石によって周囲から区画される。わざわざ区画された墓所が、建立時期の非常に離れた墓、それも不自然な墓主



の組合わせで構成されていることが気になるが、恐らく光起・光成合葬墓成立の過程と関わりがあるのだろう。

現在の土佐家墓所に足を運ぶなら、そこには寺田氏が割愛した光章の墓や、調査後に建立された光武・光輝墓があり、夭逝した子供等や妻達の墓が立ち並んでいる。土佐家は現在関東に居を移しているため、この墓所の機能は既に終えているのかもしれないが、画系としての近世土佐派の基盤となっていたのが、土佐家という家系であることに目をむけるならば、これも絵所預家の生活を知る貴重な資料となるだろう。

墓所域知恩寺境内北東にある墓地の圓光大師廟の東部にあり、大師廟前から東に延びる墓道を挟んで南北二箇所に分れている。北墓域は墓数が少なく、南墓域の四分の一程度の規模だが、古い墓が多いのが特徴である。本稿ではこれら墓碑の碑銘を紹介するのが目的である。採集に際して、土佐に関わる人物のものと思われるものは、必ずしも人物が特定できない場合でも全て収録した。

(続く)



知恩寺境内図 3